
ホットニュース(平成11年度／第23号)

●今月の業界ホットニュース／～地方の自立～

石原都知事が、TDM（ロードプライシング）に続いて外形標準課税案を打ち出し、人騒がせな人といわれている。それぞれの施策の成否はともかく、地方で自立的に模索し行動しようとする意志は強烈である。

いずれも特段目新しい施策ではなく、ロードプライシングは海外で事例はあるものの現時点での日本、ましてや東京での導入は無理であるといわれていたものであり、外形標準課税は地方税法で死文化していたものであるらしい。現在の閉塞状況を打破するために、これらを掘り起こし、国との軋轢を越えても施策として確立しようという首長としてのリーダーシップは、首都東京だからできることということ割り引いても、他の自治体にも参考になるのではないだろうか。

以前にも都市の自立と題して、都市の自立は首長のリーダーシップと都市の構成員である行政、市民等の自立にあると書いた。経済成長期のなかで発揮された国の護送力は弱まり、地域間競争は激しくなるなかで、新たな世紀に向けて地方の自立と活性化を達成していくためには、それぞれの自治体に叡智を絞り、個性を磨き、独自の施策を遂行していく力強さが求められることになる。

(代表取締役 堀田紘之)

●「歩いて暮らせる街づくり構想」について

昨年11月、経済対策閣僚会議で決定した「歩いて暮らせる街づくり」構想の推進では、まず全国10ヶ所程度の地区においてモデルプロジェクトを実施することとなった。応募の締め切りは昨日（14日）であった。ちなみに2月3日現在で100都市以上の自治体が応募しているという。

この構想は、「少子高齢化にふさわしい安全・安心でゆとりある暮らしを実現するため、オフィスや商店街、医療機関、文化娯楽施設などが混在する住民主役の街づくりを進める」のが狙いであり、14省庁からなる連絡会議が事務局となっている。整備手法の例として各省庁から約100の事業メニューが紹介されており、中活法の省庁連携と150事業メニューとほぼ同じ。

おいしいところは、選定された都市1都市あたり4,000万円の真水の補助金がいただけること。構想の内容でうれしいのは、我社推奨の「タウンモビリティ」を率先してやりなさいと明文化してあること。構想推進のポイントは、禁欲的な脱車社会へと誘導させるため、如何に歩かせるかの工夫をすること。と思う。

(都市計画部長 高尾利文)

●ポストユニバーサルデザイン～誰もが楽しめる本物の都市空間へ～

高齢化社会に向けたバリアフリーを超えて、誰もが使いやすいユニバーサルデザインがグローバルスタンダードとなっている。

一方で、21号のアーバンミレニアムに対する考察の中で提起されているように、「バーチャルリアリズム空間の主導により現実都市空間の活動が大きく減少するか」との反都市化の命題にせまられている。

極めて短い間に社会・経済環境がめまぐるしく変わる中で時間を要する都市づくりの方向性を考えるにあたっては、「社会的動物としての人間の生存空間のそもそものあり方」を基本とすべきと思われる。

市民文化が都市を形づくり、変化へのキャッチアップが都市活力の源泉となってきた構図からすれば、反都市化が方向性として考えられるのは確かだ。しかしながら、社会的動物としての人間がどこまでバーチャル都市で生きられるのか、あり方として正しいのかは別の次元の間

題ではないだろうか。

超高齢少子社会は、今日認識されている以上に「壮年・熟年時代の延伸」だと考えられる。これまでの流れを考えると、若年消費者を対象とした「チョーかわいい街並み」などがバーチャル都市に駆逐されていく方向性が見えてくるような気がする。

今後の社会の本当の主演は「壮年・熟年世代」であることを踏まえ、社会的動物としての人間の生存空間という視点で考えていくことが、誰もが楽しめる本物都市空間づくりの早道と思われる。その実現のためには今日の都市計画手法自体も再構築していく必要があるのではないだろうか。私は楽しい現実都市で熟年時代を謳歌したい。

(第一計画室長 坂井雅子)

●路上観察雑感<まちなか通勤者としての可能性について>

最近、若者が軽快にまちなかを移動する光景を目にする。何やら小さなステップの前後に車輪が二つ、手を添えるだけの簡単なハンドルがつき、片足をステップに乗せつつ地面を蹴ってシャーシャー音を立てて移動する「あれ」である。正式名称はスケータボードと言うらしいが、とにかく快適アンドお気軽なまちなか通勤者として非常に可能性を秘めていることは確かである。

移動が楽そうで私も軽快にシャーシャーといわしたいのだが、どうも若者の玩具という先入観から手が出せないでいるし、おじさんが白い目で見られてまでシャーシャーいわしたくはない。NYのビジネスシーンなら話は違うのであろうが…

折り畳むと非常にコンパクトなので電車やバスにも持ち込んで乗れるから移動範囲は確実に広がるであろうと思う。環境問題を踏まえて自転車利用の推進を唱う自治体は数多いが、このシャーシャーも同様の効果があると考えられる。実際に若者に聞くと代官山-恵比寿-渋谷の範囲なら快適に移動していると言う。電車で1駅区間エリアをカバーできるのだ。それに自転車はいくらコンパクトに折り畳んでも電車で持ち運びにくい。レンタサイクルだって借りるのは面倒くさいし、ちょっとした移動ならシャーシャーの勝ちである。それに安い(1万円ちょっと)ので、わざわざ公共側がレンタルなどと物を用意する必要もないであろうし、折り畳んでの持ち運びが前提なので違法駐輪のような問題も発生しない良いことづくめだ。マイ・シャーシャーでレッツゴー！なのである。年輩も大手を振って(実際に手を振って走ると危険)気軽にまちなかを移動できる日常の通勤者として浸透すればかなりの利用者があると思う。行政には是非とも自転車と同様にこのシャーシャー利用推進を唱えて頂きたいものだ。

しかし最近、警察がこのシャーシャーの危険性に目を付けて取り締まるとの新聞記事を読んだ。そりゃ無いでしょう？おまわりさん。危険なのは歩道を我が物顔でかつ飛ぶママチャリおばさんの方が圧倒的に多いでしょうが？

但しシャーシャーにも弱点がある。車輪が固く小さいため、アスファルトのような平らな路上なら快適に走れるようだが、ペーブメントのようなガタガタした路材だと走りにくそうである。これは逆に歩行者の快適性を考慮した空間ではスピードが出にくいという利点として捉えればよい。

とにかく、今の若者にはシャーシャーを乗るときは公共マナーを守って頂きたい。そうすれば必ずこの利便性は、まちなか通勤者として受け入れられるはずである。

玩具としてとどめずに、公共交通・アンド・シャーシャー・ライド……絶対に浸透させたいものである。

(第三計画室 海口晴彦)

アルメックホットニュース (平成12年2月15日発行)

////////////////////